

# 教職大学院 Newsletter

No. 61

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2014.4.6

## 教育改革の新しい段階

—学校拠点の専門職学習コミュニティを支える教職大学院—

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻長 柳澤 昌一

### 求められる主体とその力

自ら考え、開かれた世界でコミュニケーションし、社会形成の主体として協働する。近代の出発において新しい社会の主体の実現をめざした<自律への教育>の志向は(注1)、曲折と逆説を重ねながらも21世紀のグローバル化した経済社会において理念としてだけでなく、時代を生き抜くための基本的能力の教育としてその実現が各国における教育改革の中心課題とされるに至っています(注2)。

20世紀後半まで産業の中核であった大量生産の工場は、定型な手続きを正確にすばやく反復する力を多くの成員によって支えられてきました。これまでの学校における学習の様態が、その時代の産業の基盤であったことは疑いありません。しかし、グローバル化と産業構造の転換とともに、定型な作業についてはより安い労働力が海外に求められ、大幅な機械化によって代替される段階に至っています。さらに定型な作業にかわって、新しい価値の創出、そして人と人との結びつきをつくり支える仕事が、重要性和希少性を高め、そうした力が広く求められるに至っています。新しい可能性をひらく探究・研究・開発の力、人と人、組織と組織を繋ぐコミュニケーション力、異質なメンバーとそれぞれの力を活かし合って協働する力、そして何より柔軟に総合的に組織を調整し、発展的に再構成していく改革的なマネジメント能力が求められてきていることは疑いありません。与えられた指示に沿って、個別に正確に反復する作業に重心を置くこれまでの学習の様態を温存する限り、若い世代がその古いモードのもと長期に、しかも競争的に学び続けるかぎり、準備教育と展開し続ける雇用とのギャップ、その断層は拡大し続けていくこととなります。す

でにその拡大は30年を超える長期にわたって続き、若い世代の就業に大きな困難を引き起こしてきています。もはやこれ以上、学習とその組織の改革を遅らせることは出来ない。それは展開する社会経済的な現実を踏まえ、今後の教育のあり方を展望しようとする多くの人々に共有された認識であり、したがって教育改革の基本的方向性として国際機関において、また多くの国々の教育政策においても、繰り返し提起されてきている課題意識となっています。

### 教育改革の現実

しかし、前近代以来の他律的な教育の長い伝統が幾重にも重なり、つねに競争的に再生産され続けるなかで、新しい学習の質を、しかも公教育の名にかなう広がりにおいて実現しようとする企図は、各国における改革の挑戦の展開と帰結を辿ってみても、これまでのところ空転、あるいは失敗を繰り返しているといわざるをえません。私たち自身が歩んできた、日本の1980年代以後の教育改革の歩みもまた例外ではありません。世紀を超える公教育の歩みの中で基本的な様態・組織として形作られ、拡大し、広く伝統となってきたものを再構成していこうとする企図は、それらを最初に形成しようとした営み以上に困難な、長い時間を要し、新しい改革のためのアプローチを必要とする挑戦にならざるを得ないことは疑いありません。だからこそ、この30年を超える改革への努力、そこでの錯誤と曲折の経験から学び取って、その先を目指すことが求められていると思います。

教育改革の長い道行き。その持続を支え、さらにより広汎な展開を現実的に求めようとするならば、短期的な施策や一回限りのプロジェクトに止まることはで

きません。持続に堪える幾世代もの担い手の形成サイクルを含む、改革のための実践コミュニティとそれをより広汎に支える組織制度の実現が必要となります。

こうした持続性をめぐる問題把握なしに、“スピード感ある”方策を求め、短期的なプロジェクトとして改革を進めようとする限り、それは、もしそれが果敢に断行されるならば大きな混乱を引き起こし、実際の組織の担い手にとってはそれが容易に予想されるがゆえに強い抵抗、あるいは表面的には受け入れつつ、実質には現状を保持しようとするより柔軟な抵抗を呼び、結果的に改革への企図としては無化されることにならざるを得ません。改革の空転は、こうした短期的なアプローチが続く限りは必然となります。そしてその空転が、より切迫した、短期的な成果を求める政策を引き出すことによって、空転というよりむしろ悪循環が続いてきているととらえるべきでしょう。

一方で、社会経済的なグローバル化の現実において、求められる力の転換は、不可逆的に、加速的に進んでいます。しかし、切迫感に駆られた、短期的に効果を挙げようとする企図が、ある意味必然的に空転し、悪循環を起こしてきたことも、紛れもない現実です。二つの現実を踏まえて、この避けて通れない、しかし重すぎる課題にどのように立ち向かっていくのか、そのためのアプローチが改めて問われなければなりません。

#### 専門職学習コミュニティ：長期的な改革への手がかり

教育改革・学校改革の、表面的には失敗の繰り返しにすら見える展開の中で、一つ一つは小さくはあっても、新しい学習を実現する組織をつくる実効性のあるアプローチが、改革の前線において具体化しつつあることを認めることができます。教師教育改革の世界的な展開において、そしてそれらとも連動する福井における取り組みを通して、それを実感して来ています。専門職学習コミュニティ・アプローチ（注3）。改革のために専門職が学び合う学習コミュニティを実践の場に培い、拠点と拠点、担い手と担い手を結ぶ柔軟で多重のコーディネーター・コミュニティを編成する。挑戦の経験、試行錯誤と成果とその条件の検証を事例研究として蓄積・共有し、つねに新しい展開を組み込みつつ、持続的で広汎な改革の営みを生み出し支える。世界の改革への企図、その最前線の挫折と苦闘の中でようやく導かれてきたこうしたアプローチは、世界の教師教育改革の中で、その前線においてもっとも重要な渦となりつつあります。福井大学教職大学院の取り組みは、福井大学と学校との長い協働研究の経験を踏まえて編み出されたものではありませんが、同時にこうした専門職学習コミュニティ・アプローチの展開の中に位置づけることが出来ます。

学校拠点の、改革のための協働研究とそのコミュニティを支える組織としての教職大学院は、それ自体が多

様な分野のスタッフの協働の学びのコミュニティであることが求められ、さらにより長い実践をより広くに支えることの出来る組織へと自己改革を続けていくことが求められています。6年間の歩みは、そうした自己改革の連続であったと、ふり返って思いますが、これからの時期は、さらに大きな自己改革・組織機構改革を求められることとなります。速度を求めて空転・悪循環に陥るこれまでの改革の蹉跎を繰り返す、そして逆に揺らぎを恐れるあまり改革の阻止に傾く、二つの強い傾斜に抗して持続的で多様な専門職学習コミュニティ・アプローチを進化させていく。試行錯誤は避けられませんが、その経験を互いに精査・共有・研究しつつ、次の未知のステージに進んでいきたいと思えます。こうした困難な状況の中で、教職大学院の実践コミュニティに加わって下さる新しいメンバーのみなさん。そしてこれまででも、そしてこれからもこの変化し続ける協働組織を担い関わっていただいているみなさん。どうか、よろしく願いいたします。

(注1)T. W. Adorno, *Erziehung zur Mündigkeit*, Suhrkamp,

1971.(原千史・小田智敏・柿木伸之訳『自律への教育』中央公論社,2011). 近代の理念の逆接に対するもっとも鋭角的な批判者であったアドルノ、そしてフーコーも、死の直前において、近代の企図の出発的となったカントの小さなテキストに触れ、自身の企図と重ねている。Immanuel Kant, 'Beantwortung der Frage: Was ist Aufklärung', in *Berlinsche Monatsschrift 4, 1784 :481-494, Kants gesammelte Schriften, Bd. :33-42.* (篠田英男訳,岩波文庫版,1974,小倉志祥訳,理想社版全集13,1988,福田喜一郎訳,岩波書店版全集14,2000,Michel Foucault, 'What Is Enlightenment?' in Paul Rabinow ed., *The Foucault Reader*, 1984. 柳沢昌一「近代公教育の理念に関する二つの省察」福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻『教師教育研究』Vol.2.2009.

(注2)OECD DeSeCo, *The Definition and Selection of Key*

*Competencies, Executive Summary*, 2003. PISAの基盤となっているこの提起では、「自律的に行為すること Act autonomously」が三つ目の、基盤となる力として位置づけられている。昨年まとめられた第2期教育振興基本計画の前文においてもいま求められることとして「自立・協働・創造、に向けた一人一人の主體的な学び」が冒頭に掲げられている。

(注3)専門職学習コミュニティのアプローチについては、教師教育改革をめぐる展開にかかわって、膨大な提起と報告が重ねられつつある。展開を概観するハンドブックと重要ないくつかの論稿を示す。Carol A. Mullen ed.

, *The Handbook of Leadership and Professional Learning Communities*, Palgrave Macmillan 2009, Richard Dufour et.al. eds. *Learning by Doing: A Handbook for Professional Communities at Work*, 2 edition, 2010, Richard DuFour & Rebecca DuFour, *The School Leader's Guide to Professional Learning Communities at Work*, Solution Tree, 2012, Eisuke Saito et.al. eds. *Lesson*

*Study for Learning Community: A Guide to Sustainable School Reform*, Routledge, 2014. 福井大学教育地域科学部附属中学校研究会編『専門職として学び合う教師たち』（『学びを拓く<探究するコミュニティ>第6巻』）, エクシート, 2011.

## スタッフ退任のご挨拶

# 教師力，学校力向上に取り組む教職大学院として

福井大学教職大学院 非常勤講師 渡辺 本爾

### 1. 教職大学院の役割を考える

大学院の非常勤講師をしていると言うと、「何の講義をされているのですか」と聞かれて困ることが多かった。大学院＝講義と考えるのが一般的であり自然であるから、研究者でもない私のような「実践傾聴」の役割については、その説明がなかなか難しい。そもそも福井大学教職大学院は、学問的講義の受講によって、学校現場を離れた院生個人が、特定の領域について再学習するというようなシステムではない。院生自身が、日々変転する学校現場において同僚と共に今までと同様に活動しながら、自己の実践そのものを研究の対象にして学んでいくというものである。（ストレートの院生もまた然り。インターンとしてこれも学校現場の一員として活動する。）大学院の関わりも、院生個人を通して学校組織全体への関わりを深めていくところに大きな特色がある。福井大学教職大学院の先進性は、まさにこの点にあると言ってよい。教師の学びを「点の学び」にしないで、学校全体の「面の学び」にすることで「教師力＝学校力」としたところに、画期的とも言える教師教育の方向性が示されていると考えられるのである。

自らの資質向上のために、研修の意義は誰もが感じている。生涯学び続ける教師でありたいと誰もが思っている。しかし、現実にはその意識には格差があるし、それぞれの置かれた環境についても格差はある。そういう中で、特に中堅と言われる教員にとっては、教育理念をはじめ方法に至るまで、改めて自己確認、自己検討することが重

要であり、学校組織の行方についても視野を拡大するときである。大学院はそこに大きく作用する。将来的に管理職を目指す教師の、必須の力量形成、向上の場として、教職大学院が存在し役割を果たしていくことが肝要なのである。また、ストレートの院生にとっては、学校の「新しい風」として機能することを可能にするのである。

### 2. 「学ぶ教師」の在り方考える

教師は、日々の実践に埋没してしまっていないだろうか。1時間1時間の授業に追われ、子どもとの活動に疲労する。「多忙」が問題になる中、「実践」も「研究」も形骸化する。そういう現実を克服するためにも、私たちは原点に立ち返って、教師自らが改めて「学ぶ教師」であることを再確認しなければならないだろう。「教える教師」としてエネルギーを枯渇してしまうのではなく、自らの在り方を今一度考え直すことである。

福井大学教職大学院が掲げる「省察」と「協働」という大きな柱は、「学ぶ教師」の在り方を示す核となる柱である。「省察」することで「課題」を見つけ、「協働」することで「他者」を知る。そうして自らを変革していく。それが学びというものであろう。院生の主体的な学びを促す「省察」と「協働」を柱にしながら、教師の自己改革と併せて学校組織改革という「教師の生きる学校づくり」を進めるところに、福井大学教職大学院の大きな特色があると言えるだろう。

余分なことだが、私個人としては、正直なところ「省察」

には今も違和感がある。まず、私のような現役を終えた者の「省察」など「昔話」に過ぎないと思ってしまう。そうでなくても、「省察」には、「取捨選択された省察」であるという限界がある。何よりも省察する本人の真摯な取組があってこそ、その価値は生まれるのである。「省察」は、常に批判の対象であり、批判に耐えうる厳しさが求められているということを忘れてはなるまい。

「省察」は「省察」で終わらない。その後が見える「省察」でなければ意味がないことを私たちはもっと覚悟すべきである。

### 3. 私たちの課題は何か考える

教師の欠点は、① なかなか「感情的教育観(論)」から脱却できないこと ② 「危機意識」が欠如していること ③ 「変革拒否、現状維持」であること ④ 目先の「成果主義」とらわれることなどが挙げられよう。それらが、改革や変革を阻む要素として自らの中にも組織の中にも存在している。子どもと向き合うという

教師の仕事を確認なものにすることは、こうした自らの欠点、問題に向き合うことでもある。それは、福井大学教職大学院が「省察」と「協働」を掲げて「学ぶ教師」のエネルギーを拡大再生産していくことにつながる。問題を焦点化し問題を克服するために、教職大学院には、教師教育の理念から方法までの実際を多様に提示しながら、具体的成果として一人一人の院生と所属校の改革に見える化していくことが求められているのである。

大きな教育体制の変革に伴って、大学院の方向性も未だ定まらない状況下であっても、その果たす役割の基本的なところは変わらない。「教師力=学校力」の要としてのスクールリーダーと「新しい風」としてのストレートの院生を育成する福井大学教職大学院の存在によって、福井県下の学校だけでなく全国の学校現場の実践と研究が発展進化し根づくことを心から願ってやまないのである。

(福井大学教職大学院を退任するにあたり記す)

## 福井大学教職大学院 特命助教 山口 真希

このたび京都の花園大学社会福祉学部児童福祉学科にて講師を勤めることとなり、福井大学教職大学院を退任することとなりました。在職中はたくさんの方にご指導やご支援を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。

着任のため福井の地に初めて降り立ったのはちょうど2年前のことでした。3月の下旬に開かれた「運営協議会」に出席するチャンスをいただいた私は、それがどのような会議なのか全く分からないまま、初めて6階のコラボレーションホールに足を踏み入れました。若手スタッフの見よう見まねで資料準備を補助し、「森先生の横に座って」と指示されると、何の手がかりもないまま必死で「森先生」なる人物を探した覚えがあります。

ここでは自分がじっとしているだけでは決して何もつかむことはできない、その場で状況を読みながら動きながら理解していかなければいけない、日増しにそう感じるようになっていきました。在任期間はたったの2年間ですが、その間実にさまざまなチャレンジの場を貰い、失敗や悔しい思いを何度も重ねながら試行錯誤を繰り返す日々でした。そして何よりもこれまでの人生で一番たくさん自分のことを語らされ、振り返させられる日々でした。そのせいか不思議と時間感覚が狂い、私の中なかでは長いながい2年間でした。

学んだことは数え切れないほどですが、あえて一つを

あげるならやはり、専門を超えて語り合う、相互作用を通して見えてくる創発でしょうか。自分と経験や価値観の違う人たちも含め、枠組みや議論のパターンを意識しないでゆるやかに自由に思考できることで、時々とんでもない発想が生まれてくるあのおもしろさは、他の何にも代え難いなかなかできない体験でした。テーブルでついつい口調が荒っぽくなってしまったこともありますが、それはカンファレンス中に刺激を受けた私が、その火を消せずにおもしろさに浸っていたときのこともかもしれません。このような議論の場を共有できたこと、そこでの議論の過程、そこで出てきた考えや思いの数々が私の宝物のように感じています。これらを励みに、そして今後の糧にしていきたいと思えます。

新しい職務では、皆様からいただきました数々の教えをもとに微力ながら努力を重ねてまいりたいと存じます。最後になりましたが、みなさまのご健康とご活躍、福井発の教育が今後一層発展しますことを祈念いたしております。

## 兼任修了のご挨拶

この度、3年間の兼任の任が終わり、再び芸術・保健体育講座に籍を移すことになりました。お世話になったたくさんの方々に、心よりお礼申し上げます。

私にとって、福井大学教職大学院の一番の魅力は、互いに触発し合える「学び場」がいたる所にあることです。合同カンファレンスや集中講義、ラウンドテーブル、拠点校や連携校における授業研究会、そしてFD研修会といったように、出会う人も多様ならば学び合いの形態も様々な「学び場」があることです。ただ、そこで大切にされているコミュニケーションツールは「聴き合うこと・語ること・うなづくこと・寄り添うこと・記録すること・・・」と、基本的には同じです。「学び場」に集ってくる誰もが用意可能であり、受容的な心情がベースになっているツールであるが故に、開かれた「学び場」を創出するのでしょうか。互いの実践を交感/交換しながら共有し、個々の考える力・踏み出す力を互いに引き出し合うコミュニティが見事に形成されます。そんな魅力的な「学び場」に通い続けることができたこの3年間は、私の中に様々な変容をもたらしました。

まず、一つ目の変容は、自らが取り組んできた実践と向き合う姿勢。教職大学院の「学び場」では、自らの実践と何度も出会い直そうとする院生やスタッフたちと出会うことができました。一緒に学び合うことで、私はこれまでの自分の実践報告が、サクセスストーリー仕立てや自己陶醉の思い出アルバム型になっているのではないかと感じるようになってきました。そして、「立つ鳥跡を濁さず」の姿勢で綴られたこれらの実践報告からは、発展を促すための真の課題と向きあってこなかった自らの姿が浮かび上がってきます。

教職大学院の「学び場」では、個々の実践に寄り添うことで、過ぎ去った実践と出会い直すことのしんどさを幾度も共有させてもらいました。直視したくない課題や失敗経験と向き合い、これからの自分にとってかけがえのないものを見出そうとする真摯な実践者たちの姿勢に心が揺さぶられましたことも少なくありません。自らの実践と向き合うこのような姿勢こそが、価値ある未来をつくる「思索の人」へと成長させる糧になることを学び、私自身も自分の実践と向き合う姿勢が少しずつ変わってきました。

## 教職大学院 准教授 濱口 由美

二つ目の変容は、やっとなにげに落ちたと思えるような言葉の意味を模索することを大切にしたいと思うようになってきたこと。ついこの前も、「コミュニケーション能力とは一体どのようなものなのだろうか」といった問いを抱き、「学び場」で出会った多様な実践者たちの姿を思い出しながらその意味を探っていました。

本当に伝えたいことを対話の中で見出してくる人、相互の成り込みができる人、参観した授業記録を授業者に届け続ける人、人と人の意見をつなげることに自らの身体を差し出せる人。「学び場」で出会った様々な人々を思い出しながら、それぞれが固有にもっているいくつものコミュニケーションの力を想起していました。そして、理路整然に情報を分かりやすく聞き手に伝える力なんていうのは、コミュニケーション能力という言葉の中に潜在する意味のほんの一部でしかないという考えにたどり着きました。

こんなふう言葉の意味をたどり直す行為も、言葉に責任をもつことなのかもしれません。言葉と格闘することを避けてきた習慣を改善していきたいと今は強く思っています。

そして、三つ目は、「学び場」での出来事を楽しみながらも、「学び場」をどのようにデザインしているのかということにも興味を抱くようになってきたこと。様々な研究会に参加しても、いつの間にか、どんな雰囲気の中で、何を楽しみながら、誰と価値あるモノをつくり出そうとしているのかといったような眼差から、「学び場」としてのデザインに興味深く観察している自分に気がきます。そして、そのようなデザインにこそ「学び場」に託されたメッセージが顕著に表れていることを実感するようになってきました。

教職大学院の「学び場」で生じてきたこのような変容は、教職大学院とこれからの教員養成課程における実践をつなぐ架け橋にもなっていると思っています。今後は少し立場が変わりますが、これからも様々な「学び場」と一緒に学ばせてくださいね。3年間、本当にありがとうございました。

# 実践研究 福井ラウンドテーブル特集

## 2014 spring sessions



### 子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ／ 世代を超えて協働する学校に参加して

**Zone A**／黒潮町立大方中学校（鳴門教育大学教職大学院）教諭 明神 通恭

今回の研修に参加し、実践発表やラウンドテーブルでの意見交流を通じて「世代を超えて協働する学校を実現するためには、乗り越えなければならない多くの課題が存在しており、その根幹にあるのが、学校組織開発の課題である」ということを改めて認識した。

これまで学校は、学力の向上や学校不適応への対応など様々な課題の改善を図るために、対処療法的な取組を次々と導入してきた。今回の至民中学校の発表からは、それが多忙化の原因となり、結果として教員間のつながりが弱まって学校の教育力の低下につながっていることが明らかにされた。つまり、学校の教育課題の根本的な要因は教員間のつながりの弱まり、すなわち個業化を起因とした教育力の弱体化であると考えることができる。

この発表を聴いて至民中学校は「様々なデータを収集してそこから見えてくる生徒の実態把握と根本的な課題（中心課題）を明確化する取組」や「教育活動に優先順位をつけて系統的に整理する取組」など、改善に向けて着実な手順を踏んでいると感じた。欲を言えば、教員間をつないで協働を生み出す仕組みや工夫について拝聴したかったが、時間の関係もあって発表がなかったのが残念だった。

また赤塚第二中学校の発表は、ミドルリーダーの視点から教員のコミュニティを創り上げる過程における工夫について語られていた。教科センター方式の導入など大きな変革の時期にあたっての試行錯誤や苦労がよくわかった。実践が始まってまだ時間が経過していないようなので、この段階では無理なのかもしれないが、教員間のつながりと生徒の変容についてもう少し具体的に知りたいと思った。

その後のラウンドテーブルでは早岐中学校と堀川小学校の2校の実践発表を聴いた後で、協働をテーマに忌憚のない意見交流が行われた。この研修の形式は、県はもちろん校種や職種の異なるメンバーでの語り合いによって、視野を広げることができ、発表校だけでなく参加者も考えを深めることができるので有意義なものであった。

教員の個人的な頑張りや思いに支えられる学校から、教員同士がつながり合って児童や生徒を主語にお互いの実践を交流し合える学校に変換していくためには、実態の把握・目標の明確化・具体的取組の形成と実践・教育活動の成果の共有が全教員の参画によってなされなければならない。このラウンドテーブルを校内の研修に活用できれば、教員の自律性と学校の組織性を向上させ、学校の教育力を高める有効な手段になるのではないかと考える。



## 『集まること』で得られる確かな学び

## Zone A / 富山大学人間発達科学部 教授 松本 謙一

ラウンドテーブルが開始されたのが2001年、大学教員として私が新たな道を歩み始めた年と奇しくも重なる。

それからというもの、毎年のように参加させていただいている。特に3月開催の折には、私のかつての勤務校でもある富山市立堀川小学校の先生方と一緒に邪魔するものが、毎年の恒例行事となっており、1年間の締めくくりとして私の楽しみの一つとなっている。

ラウンドテーブルの魅力は、何と云っても『子どもの事実に真剣に学び合う仲間との出会い・再会』にある。

もちろん、一人一人の発表内容から学ぶことも多いが、それだけなら、あえて時間をかけて福井に集まる必要はないだろう。文章を読めば事足りるともいえる。

授業記録の子どもの一言一句、そしてしぐさに至るまで心を砕き、子どもの立場から授業を真摯に見直そうとしている仲間が、全国にこんなにいる。そして、集まった仲間から刺激を受け、さらに伸びるための熱い時間を共に過ごせるなんて！これこそ、ラウンドテーブルの醍醐味なのである。実際、私は毎年、『みんなも頑張っている！来年度も頑張るぞ！』と元気をお土産に、富山に帰らせていただいているのである。

さらに、今回は1日目に、「ESDって何？」(午前)と「Zone 学校」(午後)に参加させていただいた。

「ESDって何？」では、世の中が『学力・学力・・・(特に国語・算数?)』と注目する中、『生きる力』に直結

したESDを推進していこうとする先生方の熱い姿に、『塾』ではない『学校』の存在意義を再確認でき、「日本の教育も捨てたものではないな」と、うれしく思えた。

また、「Zone A 学校」では、『個』としての教師の取り組みではなく、『学校』としての取り組みに焦点が当てられ、現状と対応がつぶさに報告された。いずれの発表からも、学校としての取り組みの重要性を肌で感じさせられた。『ベクトルを一つに』と、よく言われるものの、現実の取り組みは、そう簡単ではないことが、どの発表からもにじみ出ていた。

今回の参加者は550人を突破したと聞いた。『能力・資質』が大切だと言われる中、『一人一人の子ども』に焦点を当て、『熱い教師・研究者』が渾然一体となって語り合う。これからもこの機会を大切にしていきたいものだ。



## Zone A / 長崎県佐世保市立江迎中学校 教諭 久住呂 真由美

去る3月1日(土)・2日(日)福井大学のラウンドテーブルに参加する機会を得た。長崎からイメージする「福井」は美しい若狭湾を囲む雪深い里一が、新幹線からサンダーバード号に乗りついで降り立った福井は、見事に雪のないすっきりとした風景。聞けば、珍しく雪のない年だという。ちょっとがっかりしつつも、早速福井大学へ向かう。雪つりの見事な庭園の木々を眺め、午後のZone A 学校Session I ポスターセッションとSession III フォーラムで江迎中学校が4年間取組んできた「学びの共同体」の研究実践について報告をするため、最後の打ち合わせを行う。参加した3名、皆緊張した面持ちであった。

12:50の開始時間とともに各校ポスターの前で

報告が始まった。最初に耳を傾けたのは、福井大学地域科学部附属中学校の実践。何より興味深かったのは、協働研究を支える部会を時間割上に設定し、年間30回程度は行っているという点。その構成メンバーは教科の枠を外し在籍年数も多様で4~5人、部会内の気軽な授業公開を頻繁に行い、悩みや疑問について語り合う会と説明されていた。ここでの問題提起が全体の研究企画につながっていると聞き大変参考になった。続いて、佐世保の早岐中学校の取組を聞き、いよいよ我が校の報告。前研究主任が熱弁を振るい、参会者から多数の質問も出て、あっという間に15分が過ぎた。全学年で取組んでいるコの字の座席、生徒と生徒をつなぐ教師の役割、何より学校全体で同じ方向に向かって研究を進めている姿勢が高く評価されていたように思う。

Session IIはシンポジウム「世代を超えて協働する学校」に参加。福井市至民中学校の校長・教頭先生より学校を組織として運営することについての実践と福井大学教職大学院拠点校である東京都板橋区立赤塚第二中学校の授業改善を柱とした協働研究の実践の報告を聞いた。どの中学校も抱えている「荒れ」の現実に対して校長・教頭、中堅教員と立場は違えど、〈学力保障〉の面から「世代を超えた学校作り」に模索されている姿に深く共感を覚えた。

Session IIIフォーラムと次の日のSession IVは、各会場に別れ、5・6人のラウンドテーブル方式で報告を聞き、議論し共有するというスタイル。小・中・高・養と普段交流の少ない校種の異なる先生方の熱心な実践と様々な意見を拝聴し、大変刺激を受けた。ここで学んだことは、研究には終わりが無いということ。自校の改善に協働して取り組むためにはどうしたらよいか、よく考え実践の場に生かしていきたい。

## Zone B / 東京学芸大学教職大学院 准教授 渡辺 貴裕

ラウンドテーブル2014の1日目、Zone B「教職大学院をイノベーションする」に参加した。私は、Session IのポスターセッションとSession IIIのフォーラムにおいて東京学芸大学教職大学院の取り組みを紹介する役を務めた。

私は、2013年10月に関西の私立大学の教育系学科から現在の職場へと移ってきた。教職大学院制度が抱える課題は理解しているつもりだったが、いざ移ってみると、カリキュラムや指導体制から組織運営、教育委員会との連携に到るまであらゆる面で問題が噴出している現状（とそれにもかかわらず見られる学内での危機感の欠如）に愕然とした。

今回のラウンドテーブルには、他大学の状況を知りまた本学での取り組みへのコメントを頂くことで、私が今職場で同僚と始めつつあるカリキュラム改革に役立てたいと考え、参加した。ポスターセッションおよびフォーラムでは、私という「よそもの」の目から東学大教職大学院はどう見えたのか、今そこで何をしようとしているのか、率直なところを話した。

フォーラムで同じグループになったのは、福井大関係者と上越教育大教職大学院の院生に加え、栃木、広島、岩手、和歌山の大学教員・教育委員会の方。いずれも、2～3年後の教職大学院設置に向けて動いている県である。こうした「新規参入」組が効果のある教職大学院を作るべく情報収集を行っていることを肌で実感した。議論のなかでは、「実務家教員」の位置づけと人事、アカデミックな内容の意義と扱いといった内部の問題から、「各専門分野の教養は学部段階で身につけておくべき」といった教職大学院の接続にかかわる問題まで出された。

ラウンドテーブルでの議論をふまえてあらためて認識した課題。それは、(本学の場合も含めて)教職大学院の実習や課題研究・実践研究にかかわってしばしばなされる「学校現場から課題を発見」「課題を解決」といった言い方の問題である。もちろん、実践において課題解

決の思考を働かせることは重要であるし、現場と遊離した研究に陥らないようにという趣旨も分かる。しかし、「現場」の「課題」を「解決する」とはそもそもどういうことなのか。それは区切られた期間内に達成することが期待できるものなのか。課題研究・実践研究においてこれを求めることにより、「成果」が出しやすいものへと「課題」が矮小化されてしまう危険性、そこで子どもが振り回されてしまう危険性はないのか。こうした学校現場との距離の問題について考えた。

先にも述べたように、本学では今カリキュラム改革に取り組んでいる。そこでは、福井大の「学校拠点方式」とは異なるモデル、(現職院生の場合だと)学校での通常職務からいったん離れることの強みを活かしたモデルを目指している。私自身「福井方式」には多くの点で賛同しそこから学ばせて頂いているが、これは高度教員養成の唯一のモデルではなく、自校が置かれた条件を最大限に活用するモデルの構築が本学には必要であると考えからだ。今回のラウンドテーブルではこうした挑戦に向けての刺激を得、また貴重なネットワークに加わせて頂いた。1日目の最後、Zone Bの懇親会では某先生より「眠れる獅子の東京学芸大学の…」と話を振って頂いた。日本の教員養成の「基幹大学」を名乗る本学の教職大学院が目覚めて「獅子」としての活躍を見せられるよう、改革に挑みたいと思う。





## Zone B / 新潟大学 一柳 智紀

教職大学院とはなんなのだろうか。これまで様々な形で見聞きしてきたものの、よくわからないままであった。そして、今回のラウンドテーブルに参加しても、やはりまだよくわからない、さらに問いが生まれた、というのが本音である。それでも3つのセッションを通して先生方のお話をうかがう中で、たくさんのことを学ばせていただいた。

その1つが、理念やビジョンの共有の大切さとそれを実現する仕組みである。今回のラウンドテーブルに参加して、改めて「教師を育てる」、「学び続ける教師を支援する」、「実践と省察の往還」、「養成＝大学、研修＝学校・教育委員会という断絶した役割分担の克服」、「教育委員会と大学との連携・協働」といった言葉を幾度も耳にした。いずれも、教職大学院における教員養成の根幹をなす教職に対する認識であり、教員養成改革の理念・ビジョンである。ただし、これらは必ずしも共有され、自明のものではないとも感じていた。私自身、これらが意味するところを、実感を伴って理解することが未だにできていないことを改めて感じた。

これに関して、私がうかがった山梨大学や福井大学の実践で印象的だったのは、専門分野の異なる研究者教員と実務家教員とのチームティーチングを基礎としたカリキュラムの構想・実施や、現場の実践とその課題の共有、毎週のFDなど、教職大学院のデザインのなかに、ビジョンを共有していくための仕組みが幾重にも組み込まれ、互いに密接に結びついていることである。とりわけ、これらが上述の理念やビジョンを単なる題目として共有する場ではなく、絶えずその意味するところを実践

に基づき省察していくという、プロセスを共有する場となっていることが印象的であった。だからこそ、大学教員も教育委員会も学校も、絶えず構成員が変化していく中であって、既存の輪に閉じこもることなく、ビジョンを共有しつつ、持続・発展していくことが可能になるのではないかと感じた。

一方で、ラウンドテーブルに参加することで新しく生まれた問いもある。その1つが、教職大学院での学びをどのように捉え、記述していくことが求められるのかということである。福井大学における今回のラウンドテーブルや長期実践報告書もその1つだろう。しかし、これらは院生が主体となった自身の学びのナラティブが中心である。教職大学院を出た院生がその後も学び続けることができるのか、マネジメント力はどのように成長・発揮されているのか、学校の課題はどのように展開・解決されているのか等々を、特に研究者教員はいかに捉え、記述し、発信することが可能だろうか。教職大学院そのものが革新的に発展している一方で、こうした教職大学院での学びを捉える視点や方法論は、まだまだ既存の枠組みに依拠している部分が多く、イノベーションの余地があるように感じた。ここにも、大学と学校・教育委員会の連携・協働が不可欠だろう。

このように、わからないことも含めて、さらに学びたい、学ばなければと感じる、とても刺激的な時間であった。先行事例に学びつつ、自らも実践と対話しながらいかにして「学び続ける教師を支援する」ことができるのか、探究していきたい。

## Zone C / 至民中学校 サポート至民 杉本 久美子

一月、「しみんステーション」でのいつもの定例会において、先生から「3/1-2とラウンドテーブルが行われますので協力お願いします。」との話がありました。「ラウンドテーブル」がどのようなものなのか、説明を聞いても理解できませんでしたが、院生の方から、「毎週集まる定例会のような感じで取り組んでくださればいいですよ。」と言われ、私は軽い気持ちで参加させていただきました。

意見交換をしながら話し合うつもりで、テーブルの席に着くと、「これ迄の取り組みの経過・実践してきたことを報告してください。」と言われて戸惑ってしまいました。

初めに、大学生の方が資料を配り発表して下さいま

した。最初は活動グループでの意思の疎通が図れなくて困ったこと、しかし、企画事業が具体化していったときには努力が実ったという喜びと達成感を感じたこと、そして人と人とが繋がることで可能性が広がっていくと実感したこと、などという内容でした。私は、我々も同じような体験をしたな…、と思いながら聞いていました。

次に、私の発表になりました。配る資料の準備もなく不安でしたが、おばさん根性で始めました。「サポート至民」は、来校する視察団の方達へのボランティアガイドとして発足したこと、中学生と生産組合や地域の自主活動グループの方達と行った古代米の田植えや学校祭でのそば打ちのこと、生徒たち自らが企画した収穫祭でお世話になった方達にお礼の気持ちを伝えたこと、ま

た、公民館主催の行事にも生徒たちが参加していることなど、発展的に展開していった6年間の活動を、思い出しながら取り留めもなく話しました。

不慣れな発表で分かりにくかったのではないかと、リーフレットなどの配布資料が必要だったのではないかと、事例をもっと具体的に報告したらより理解してもらえたのではないかと、など心配しましたが、教師でもなく学生でもない我々の学校との関わり方について、同席の方からお褒めの

今回のラウンドテーブルでは大学での仲間との実践を通した学びと、自分個人の学びをつなげるようにして繰り返すことのできる貴重な機会であった。

ポスターセッションでは、大学そして大学院においての実践を通した学びについて、学年の立場から振り返ることができた。

ポスターを作っていく中で、それぞれの参加している授業や活動は違っていても、実践を通して学んでいるということは共通しているということ表現するために、どのような図がいいか話し合った。中でも、それぞれの活動の小さなサイクルが重なり合って、編み上がっていているのではないかとという見方が生まれ、重層的に活動を見ることができた。

実際に発表してみると、授業ではどのように学んでいるのかなどの問いかけがあった。それに対して、文献を使って生涯学習の概要について学ぶが、その前後に自分の実践があることで、文献に自分の経験を照らし合わせることができ、初めて腑に落ちると考えている自分に気づくことができた。ポスターセッションでは準備段階、そして当日の流れの中で、自分たちの大学における学びを位置づけることのできる良い機会になったと感じている。

ラウンドテーブルでは、復興支援ラウンドテーブルにおける私自身の変化や気づきについて報告した。報告

言葉を頂けたのがとても嬉しかったです。

「サポート至民」としてできることは、思いやりのある人、心豊かな人になってもらうための学びの場作りの為に、ただ一つ、校内外から「生徒たちの三年間を見守ること」しか無いのではないかと思います。そして今後も、地域の公民館、地元の人達、学校の先生方と、協働することを積み重ねてゆけたらいいなと思っています。

## Zone C / 東京学芸大学 高橋 若菜

の最後に、「震災の話をするのは辛いし、記録化することも辛いことではあるが、…でも、やった方がいいと思うんですよね。」とさらっと話した。すると一人の方が、「高橋さんが、今、復興支援ラウンドテーブルは、とても大変だ、とおっしゃいましたよね。でも、そのあとに、やったほうがいいと思うのもちよっと言われましたよね。私、後半の方が高橋さんの本音だと思うんです」と言った。

今振り返ると、震災の話福島県が会場ではないラウンドテーブルでするので少し緊張していたと思う。そして、なるべく他県に住む人にも受け取ってもらいやすくなるように、震災を通して自分が考えたこと、変化してきたことなどについて語ろうと思っていた。そのため無意識的に「やった方がいいと思う」という本音を隠して、軽く言ってしまったのだと思う。しかし、そこを見抜かれた気がしたので驚いた。自分の本音は、復興支援ラウンドテーブルを続けたい、そしてそれを分かっていた、という気持ちを持っていたことに気づいた。

東京に戻り、福井大学ラウンドテーブルのふりかえりをした。各自のラウンドテーブルでの経験が、それぞれの観点から語られ、仲間とふり返り、また実践に生かしていくというサイクルを私自身もつくっていきたくて以前より思うようになった。

## 「いつもと違ったラウンドテーブルで学んだこと」

## Zone C / お茶の水女子大学社会教育主事講習受講生 牧田 伸子

私は、今年度、お茶大社会教育主事講習で社会教育について学び、仲間8人と共に福井のラウンドテーブルに報告者として参加した。私の実践は、昨年3月まで勤めていた神奈川県川崎市の公民館で、0歳児を持つ母親を対象にした講座を受講した人たちが講座終了後、自分た

ちの手で講座やイベントを企画し提供するグループに育つまでの「職員として」の関わりと公民館に勤める以前、私自身が「市民として」子育て支援の活動をしていた際の職員との関わりについて省察したことである。

ラウンドテーブルで報告するのは、今回で4回目に

なる。毎回、肯定的に聴いていただき、ほめられたり、励まされたり。また、質問されることで新たな気付きがある。そして、他の人の報告に発見がある。いつも緊張するけど楽しいのがラウンドテーブルだった。今回も一日目は、社会教育を実践している方々と活発な話し合いをすることができ、充実した時間を持つことができた。

ところが、二日目のラウンドテーブルは、いつもと少し様子が違った。私のグループのメンバーは、大学、中学校、小学校と接している子どもの年齢こそ違うが、私以外は、全員「先生」と呼ばれる方々だった。私の報告が終わると、「ごめんね。よくわからないんだけど、公民館ってどんなところ?」「講座ってなにをするの?」と聞かれ、正直度感を感じた。学校の先生とは、社会教育については、話せないのかもしれないと思った。私以外の二人の先生の報告は、どちらも授業に関すること

だった。それは、ほんとうにすばらしい実践だった。でも、学校教育であって、社会教育ではないんじゃないかと思っていた。しかし、話し合っているうちに小学生が天竜川を下るためにどんな船を作るかをグループで話合ったり、中学生たちがお互いの俳句を読み合ったり批評し合ったりするのは、私がお茶大で何度も何度も行ったグループワークと同じだと気づいた。先生方は、社会教育という意識はないかもしれないけれど、立派なファシリテータとして子どもたちを導かれている。社会教育は、社会教育施設の中だけで行われるものではないということがよくわかった。人が集まるところどこにでも「学び合うコミュニティ」を作れるということを伝えていくのが主事講習を終了した私の役割だと思った。素敵なラウンドテーブルに参加できて心から感謝している。

## Zone D / 与論町立与論中学校 教諭 今村 忍

福井ラウンドテーブルでの授業報告が決まってから、今の授業実践を振り返るいい機会となりました。研究公開のような感じの会になるのではないかと考えて構えていましたが、小グループの話し合いでは、ファシリテーターの方がうまく話を聞き入れ、振ってくれたおかげで、とても楽しく充実したものになりました。ところ変われば、考え方や教育方法も少し変わる。その違いが新鮮であり、自分の考えの幅を広げてもらったように思えます。

現在、与論中学校に5年間勤務しておりますが、与論島に来る前は、岐阜県との教育交流で3年間岐阜県の教員として勤務していました。岐阜県の教育を学び、自分なりに吸収して鹿児島島に帰った訳ですが、県を越えるとそれぞれ教育方法に違いがあります。当然でしょうが他県の教育方法に合わせないといけないところも出てきます。「なぜ、どうして」と思うこともたくさんありましたが、その中で自分の考え方が広がっていきました。

今回、報告させていただいて、「問いとは?」と考えていくうちに教育というよりも哲学のような考えにもなっていました。自分の頭の中で考えるだけで、それをどう実践していくか問い続けることもしばしば。「問い」と聞くと難しく、また理論的に考えなくてはいけないと思いき、深く追求しようとしたのですが、答えは簡単ではありません。ただ、問い続けることが大切であり、自分を成長させてくれるものであることは確信しました。

同僚の教員から「先生どうでしたか?」と言われ、開口一番「楽しかったよ」という言葉が出てきました。その教員は本校で研修主任を担当し、校内研修でどう

やったら意見が出るかと考えています。今回のラウンドテーブルでのことを話したら、「楽しそうですね。自分も行ってみよう」と言われたとき、「こんな研修を本校でもできないか」とふと考えました。時には、こういう研修をしていけば、教育は楽しいものであり、生徒たちに分かりやすく伝え、共に進んでいけるものと思えます。ただ楽しいものにするためにはそれなりの努力の積み重ねが必要ですが。

「問い続けることは悩み続けること」と考えることもありましたが、「問い続けることは前に進むこと」とコーディネーターの富永氏が言われたことがとても心に残りました。

最後に、報告の機会をつくっていただいた福井大学教職大学院、そして研修視察を快く受け入れていただいた丸岡南中学校の方々に感謝申し上げます。



## ■ ラウンドテーブルに参加した院生の報告

### 平成25年度修了生／福井大学教育地域科学部附属中学校 木下 慶之

550名を超える参加者があり、今回もいろいろな方々と交流することができました。中には「ラウンドテーブルマニアなのです！」と、最近いろいろな地域で開かれているラウンドテーブルに連続して参加されている学生の方もいらっしゃいました。自分の実践を語る、または他人の実践を聴くことで、これまで自分になかった新たな視点や気づけなかった視点、そして自分の実践に対する共感、さらなる実践に向けての勇気などをいただくことができるのが、このラウンドテーブルのすてきなところだと感じます。

さて、私は1日目Dグループ「授業改革の扉をひらく-「問い」はどこから生まれるのか?」に参加しました。「問い」をどう生み出し、「問い」をどう学習展開につなぎ、子どもたちをどのように「問い」と関わらせることが教師としてできるのか。「探究」をキーワードとしている本校にとって、まさに「問い」とは「探究」のスタート、「主題-探究-表現型」学習における「探究」を成立させるための「主題」に直結するものです。まず、シンポジウムでは「ESD」に関する5名の方々の実践報告を聴きながら、クロスセッションを行っていきました。『「ESD」って何ですか?』という大学2年の深川さんの質問から始まり、「ESDとは何を指しているものなのか?」、「何をもちてESDなのか?」を同テーブルのメンバーと話し合いました。字面からいえば「持続可能な発展のための教育」ですが、果たして何をもちてESDといえるのでしょうか。「当たり前前のことを当たり前前なことと思わない。現状を問い直し、自分が目指しているものは何かを再度捉え直す。」「子どもたちが自らの生活や社会から問いを見出し、自分たちの課題として問いと向き合い、解決・解明に主体的に関わる。」「教師として子どもたちを考えや想いをしっかりと把握し、次の展開を考える。」「理論をどのようにして実践に結びつけるか。」など、わずかな時間でしたが、初めて出会ったテーブルメンバーは、いつの間にかチームになり、互いの考えを共有し合い、「問い」と「ESD」をキーワードにして議論を重ね合わせていくことができました。

堀川小学校のESDの取り組みや、大学時代の先輩である齊藤先生のESD担当としての実践、M2の後藤さんの子ども達の活動の分析、石川県寺井小学校の北川先生の総合学習の実践など、子ども達の「問い」を大切にした授業、学習の場、研究の在り方について多様な視点から捉えなおす機会をいただきました。

2日目のラウンドテーブルでは、教職大学院でまとめた長期実践報告書「ICT」をもとに、これまで自分が

附属中学校で経験してきたこと、理科教員としての意識の変容と今後の展望などを聴いていただきました。テーブルメンバーは矢内さん（早稲田大学大学院）、多賀さん（奈良女子教育附属中）、山本さん（越前市教育委員会）、米沢さん（広島大学大学院）と私の5名でした。生まれ育った地域、職場や環境は違えども、対話の中で何かしら共通点が互いに見つかり、そこからまた新たな視点をいただけるのがラウンドテーブルです。「量的研究と質的研究がバランスよくとれた教育研究ってできないかな」という提案をいただいたり、「木下さんは附属中を出られたら、附属中や教職大学院での学びを公立学校でどう生かすのですか?」という質問をいただいたりしました。自分はこれから何をすべきなのか、どのようにして、子ども達のための実践につなげていくべきかを改めて考えさせられました。

「ラウンドテーブルに来なければ経験できないのではなく、このような場が自然に醸成するような社会、コミュニティが創造できるといいよね」というお話に、次第に発展していきました。子ども達にとっての将来、自分の考えや想い（うれしかったこと、気づいたこと、感動、悩みなど）を気軽に伝えることができ、耳と心を傾けて聴いてくれるような仲間をつくることができるとよいと思います。そのために、実社会に出る前のプレ社会ともいえる学校生活において、その有能性、効果について、子ども達に十分に実感させてあげることの必要性を強く感じます。

持続可能な発展を目指す社会、それを創っていく子ども達、そしてそれを支えるために教師である私自身も「ESD」・持続可能な発展（成長）ができるよう研究に努力していかなければなりません。

というわけで、今回も「参加したことで、またこれからも頑張ろうと思える」そんなラウンドテーブルでありました。



## 平成25年度修了生／京都市立大宅中学校 月澤 光恵

3月1・2日、私にとって大学院最後のラウンドテーブルが始まった。私は2日目に、大学院での2年間のまとめである長期実践研究報告書についての報告をすることになっていた。3月1日の少々どんよりとした天気は、まるで私の心の不安を映しだしているかのようであった。

1日目は、不安を紛らわせるために、この2年間実習でお世話になった福井市至民中学校に関係している発表にばかり足を運んだ。そこで私は、学校とは多くの人たちが関わるべき場所であると、改めて感じる事ができた。私は1日目に至民中学校の地域連携についてまとめたポスターセッションを、中村院生と共に行った。話が上がったのは、至民中学校を陰で支えてくださるOB・OGである、サポート至民の皆さんと共に行ってきた学校行事である。実際に、今回のラウンドテーブルでも、サポート至民の皆様が来てくださり、学校とのかかわりについての話をしてくださった。他府県からいらっしゃった方々からお話を聞いていると、「サポート至民の人たちをうごかす原動力とは何なのか。」という、同じ疑問を持たれているようであった。

こればかりは、私がお話しできることではなく、私が思いを代弁することは大変難しい。そんなときに、サポート至民のみなさんが近くで話してくださると、質問をしてくださった皆さんに思いを伝えることができる。そういう意味でも、皆さんの関わりはありがたく、改めて地域と学校の連携の重要性を実感した。

2日目は、発表に力を入れることにした。私が発表をさせてもらったときに、私は自分の実習に価値をつけて貰うことができた。

私は1年目のインターンシップで、一人の生徒を中心に追ってしまった。実習が終わりにさしかかったときに、初めて、私は周囲の生徒の存在に気が付き、1人の生徒に意識を集中しないようにするようになっていた。当時の私は、「通常学級を見ていくことを目標としているにも関わらず、1人を見ていたのか。」と考えてしまっており、当時の自分の視野の狭さを反省していた。しかし、ある大学の先生から、「ひとりを見ることができて、初めて全体を見ることができる。そのスタートは、間違えではなかったのではないかな。」というお言葉を頂いた。私はその言葉に、大変救われた。自分のやってきたことが、間違いではなかったのかもしれないと感じた瞬間であり、自分の長期実践報告が意味のあるものになった。はじめは不安でしかなかったラウンドテーブルであったが、自分にとって実りある時間となった。



## スクールリーダー養成コース2年／勝山市荒土小学校 玉村 伸一

春の訪れが近づいてきた3月1日、2日に福井大学で実践研究福井ラウンドテーブルが開催された。私は、1日目セッション0の「ESDって何？持続可能な社会へ向けた学校教育とは？」に参加した。ここでは、岡山理科大学理学部教授の岡本弥彦先生と富山市立堀川小学校校長の高木要志男先生の発表があった。私が勤務する荒土小学校のある勝山市では、市全体でESDに取り組んでいるので、他県の学校でどのような実践をされているのかとも興味があった。

最初に、岡本先生から「ESDとは何か？」「なぜESDが必要なのか」「何をすればESDになるのか」「学校教育でESDを進める上で重要なことは」の4つのこと

について話があった。私は、「ESD＝環境教育」と考えていたが、岡本教授の話聞いてESDは全世界的で取り組まれていること、ESDが環境教育だけではなく、いろいろな教育の根底にあるものであることを知ることができた。

次に、高木先生から堀川小学校のESDの取り組みについて発表があった。堀川小学校では、「子どものくらしづくり」と「人々、社会、環境」を授業、教育活動、地域活動を通して結びつけていく教育を行っている。1日の流れを朝活動、くらしのたしかめ、授業、自主活動として設定し、その中で持続性、可能性を大事にして人として生きることを学ぶことを目指して実践していることを聞いて

た。堀川小学校の詳しい実践内容は、ゾーンDのポスターセッションやセッションⅡのシンポジウムでも発表された。

ゾーンごとに分かれてのポスターセッションでは、石川県能美市の寺井小学校の北川先生、福井大学附属小学校の大橋先生と宮本先生、勝山市立北部中学校の斉藤先生、富山市立堀川小学校の杉林先生が、それぞれの教育実践を発表していた。とても興味深い実践ばかりで、これからの自分の教育実践に参考にできるものばかりであった。

セッションⅡからのシンポジウムは、コラボレーションホールで行われた。ホールに入りきれないほど多くの参加者で、とても熱気あふれる会場となった。小グループに分かれて、『「問い」はどこから生まれるのか』をテーマに実践報告とグループ協議が行われた。私は、自分のグループで予期せぬファシリテーターの役になり、和歌山県の特別支援の先生や埼玉県の高校の英語の先生など4人の若い先生方と協議を行った。実践の報告は、鹿児島県の与論島から与論中学校でのレポート作りの実践を報告した今村先生をはじめ、勝山市立北部中学校の斉藤先生など5名の方が発表した。その中で特に印象に残ったのは、石川県能美市立寺井小学校の北川先生の、4年生「八丁川環境たんけん隊」の取り組みについての発表であった。私も4年生を担当していたので、どのような実践に興味を引かれた。子ども達は、寺井小学校の近くを流れる八丁川についていろいろな人の話をきっかけに興味を持ち、川で工事が行われることを知った。そして、子ども達は、自分たちで工事への賛成反対を議論したり、近所の人たちに工事の是非を問うアンケートをしたりなどし

て、自分たちの意見をまとめ土木事務所にまで手紙を送り大人達を動かした。私は、子ども達のその姿に、子ども達が自発的な学びを始めたときにすばらしい力を発揮することに感動した。また、その学びを支えた北川先生の努力を自分も見習いたいと思った。

このような実践を聞いて、グループ協議を行った。協議をしていく中で、「問い」はどこから生まれるのか、いつ生まれるのかそれぞれの考えを出し合った。そして、「教材と子どもとの距離感が近いほど問いが生まれるのではないか。」「子どもの立場になって考えると問いが見えてくるのではないか。」などの意見が出された。また、教師は「子どもの問いを活かすために知識量を増やしていかないといけない。」「子どもの姿から子どもの問いを読み取っていかないといけない。」との意見も出され、教師としてどのような力をつけていかないといけないかを改めて考えるよい機会となった。



## 平成25年度修了生／長野県岡谷市立岡谷南部中学校 召田 幸司

長野県から長期研修として福井大学教職大学院に派遣された1年間の研修も、3月のラウンドテーブルをもってすべてが終了することになる。長期実践報告を2日目に報告させてもらう経験もした。自身の実践を省察したり、福井で安居中と至民中に入らせてもらって学んだことを記したりしたものである。その報告が一通り終わり、いくつかの意見が出される中で、改めて考えさせられた質問があった。北海道の札幌市教育委員会で活躍されている方からのものだ。「今まで実践の中で大切にしてきたことが、福井に来たことでどう考え方が変わったのか」というものだ。一瞬考えたが、1日目にZone Aのシンポジウムで語られた至民中学校淵本校長先生から教えられたことが浮かんできた。

私は長野県から派遣される時から3つのテーマをもっていた。それは「子ども同士をつなぐ学校づくりをどう

進めていけばいいのか」、「教員同士をつなぐ学校づくりはどう展開していけばいいのか」、「地域と子どもをつなぐ学校づくりはどう仕組んでいけばいいのか」である。こういったテーマで安居中学校で生活させてもらっていると本当にいくつもの学びが見えてきたのである。しかし、10月から入った至民中学校では、このテーマではないことにシフトした。それは「安心・安全な学校づくりを進めるにはどうしたらいいのか」である。生徒指導上の様々な問題を抱えていた至民中学校では、まずは「安心・安全な学校づくり」が先決だったからである。そんな現状だった至民中学校も、現在は確実に生徒指導上の負のスパイラルから脱出し、次のステップへと移行している。それはいったいどこにあったのだろうか。そのことを考えると簡潔に言えないが、おそらく学校長と職員が学校づくりのビジョンを共有し、具体的な

アクションを次々に打ってきたからだろうと思う。もっと簡単に言ってしまうと、職員とベクトルをそろえたからだろう。しかしこれは実に難しいことでもある。淵本校長先生から教えてもらったことはここにある。

私は「あるべき子どもの姿」、「理想とする学校像」といったものが先にあり、これに「現状」をどう近づけていくかということで、今までの実践をしてきたように思う。しかし、淵本校長先生は、「課題把握」という「現状」認識から入り、学校づくりのベクトルを職員と共有していくのである。「子ども同士をつなぐ学校づく

り」も「教員同士をつなぐ学校づくり」も「地域と子どもをつなぐ学校づくり」も大切なことであり、残りの20年ほどの教員人生も引き続き追究していきたいと考えている。しかし、「現状」認識から入って先生方と協働して学校づくりを推進していきたいと今は思うようになった。これが福井で学んだ一番大きなことだと思っている。3月のラウンドテーブルでこのことを意識化できたことが、長野に帰ってからの大事な指針になると思う。

## 教職専門性開発コース2年／啓新高等学校 宮川 翔太

3月1日。新たな月の始まりの朝を迎え、まず向かったのは私の実習先である啓新高等学校の卒業証書授与式であった。卒業できる嬉しさと寂しさが入り混じった複雑な表情で登校してきた卒業生たちだったが、式が終わるころには多くの生徒が涙を流していた。泣きながら体育館を去っていく卒業生たちは、この3年間を啓新高校で過ごしてきたよかったと思えるからこそ思いが溢れてきたのだろう。生徒が啓新でよかったと思って卒業できることに、生徒とともに悩み、喜び、生徒たちの未来を見据えて支え導いてきた、先生方の情熱を感じるとともに、子どもの未来のために実践していくことの大切さを改めて感じ、素敵な時間を過ごした。

素晴らしい卒業式の余韻に浸るのも束の間、午後からはラウンドテーブルに参加した。6月に参加したラウンドテーブルとは違い、今回は報告もあったため、緊張するよりは楽しもうという気持ちで臨むことができた。

Session I のポスターセッションではZone Bで発表し、発表後はZone Dに参加した。他大学の教職大学院、また教職大学院の設置を検討している大学の教授方がたくさんお見えになり緊張したが、みなさん興味を持って耳を傾けてくださった。途中で、みなさんの興味はお隣の松木先生のポスター発表へと移ってしまったが、教職大学院での私たちの学びを語ることもできたと思う。教職大学院の関心の高まりを肌で感じた発表だった。自分たちの発表を終えて1階に降り、通る隙間もないほどの人数の多さに圧倒されながら、富山県立堀川小学校、勝山北部中学校、附属小学校のポスター発表を聴いた。ESD（持続可能な発展のための教育）をキーワードに、子どもに委ね、学び合い、関係づくりを模索するところから子ども同士のつながり、子どもと地域社会のつながりまで見据えた取り組みを紹介していただいた。

Session II, IIIでも引き続き、Zone Dに参加した。Zone Dのテーマは、「授業改革の扉を開く - 問いはどこから

生まれるのか -」であった。5人の院生、先生方の実践報告を聞き、とくに石川県能美市立寺井小学校の北川先生の実践報告は、私にとって非常に印象的だった。子どもが問いを持ち、その問いの解決のために地域を駆け回り、行政をも動かすまでの展開の流れのスムーズさに何より驚いた。そして先生の実践の語りから見える、自分たちの問いを解決しようと生き生きと学ぶ子どもたちの姿、子ども中心で学びが発展していくその様子に胸を打たれた。それぞれの報告のあとに設けられていた小グループでのセッションでは、「問いはどこから生まれるのか。子どもからか。教師からか。子ども自身から問いが出るとは限らない。自然発生的な問いとは何か。生まれた問いをどうつなぎ、発展させていくか。」など、問いについて考え話し合っって新たな問いを生みだし、深め合っっていった。私はこのとき、実践報告の1時間、1単元に視点があり、授業として、教科として問いはどこにあったかを見ようとし、話していた。実はラウンドテーブルに参加するまで、ESDというキーワードもいまいちわからなかったが、先生方の報告、セッションを通してじっくりと考えた結果、私なりの解釈を得ることができた。

「問い」は、生きていく上で必ず持つものであり、社会や地域など、暮らしに身近なところにある。身近にある問いにどれだけ気づけるか。そして、その問いに出会ったときに解決するための方法を子どもたちは学んでいる。彼らが大人になったときに、問いの対処、解決の仕方を学んだことを社会の発展のために活かしていく。ここまでを見通した教育が「持続可能な発展のための教育」なのだろうと解釈した。子どもたちの学びを支えていく教育が、子どもたちの成長、社会の発展へと大きな役割を持っていることを再認識できたセッションであった。

## 嶺南教育事務所 第19回 教育研究発表会に参加して

さる2月19日(水)に開催された嶺南教育事務所の第19回教育研究発表会に参加した。私は嶺南教育事務所の担当者の一人ということもあり、年間を通して所内カンファレンスに参加して学びあってきているので、年度末の最終の発表会の場にも参加させていただいた。この発表会は毎年2月に開催されているが、所内の研究員の先生方だけではなく、嶺南地域の先生方の実践研究の発表の場でもあった。今回は5名の研究員の先生方以外に、9名の小・中学校等の先生方も発表された。今回の発表会の特徴は、昨年度もワークショップ形式の発表会を一部の分科会で取り入れたが、今回は全部の分科会が1人45分間で、前半を発表、後半をそれぞれの発表者が考えたワークショップを取り入れた形で行った。全体的な印象は、非常によかったという感想である。短い時間で、発表者が一方的に話し、聴き手は若干の質疑応答をする、という従来の発表会ではなく、発表者の数は少ないが、一人一人の持ち時間を長くして、じっくりと発表しじっくりと聞きあうという関係性を生み出していたと思う。ワークショップは参加者がお客さんではられない。参加者も緊張感をもち、初対面の参加者同士が今の発表を踏まえて、日ごろの自分自身の考え方を省察し、模造紙にグループで協働して表現していく、という高次の参加意識が求められる。当然であるが、発表者だけの学びの場ではなく、参加者にとっても学びの場となるのである。

私は本事務所の担当ということもあり、5名の研究員の先生方の発表は出来る限り聞かせていただいた。年間を通した所内カンファレンスで2年間、又は1年間お付き合いさせていただいていたが、4月当初から今までの2年間の学びの集大成が表れている発表会であったと思う。5名の研究員の先生方は以下のタイトルで発表された。2年目の3名の先生方は「学習指導におけるICT活用の在り方」(松井昭男先生)、「学び合う集団に高めていくための人権教育の在り方」(堀口美紀先生)、「不登校および不登校概念児童・生徒の復帰への対応の在り方」(松宮弘明先生)、1年目の2名の先生方は「人間関係形成・社会形成能力を育てる教育相談の在り方」(竹原誠先生)、「主体的に学ぶ子どもの育成

のための授業と教材の工夫」(伊藤元宣先生)である。

特に印象的であったのは、松井先生のICT活用の報告であった。松井先生は教職大学院の修了生で、そのまま4月から研究員になられた経緯もあり、継続して関わりを持たせていただいた。当初はICT活用については学校のICT環境も整っていないこともあり難しい状況であることを述べられていたが、その後、学校のICT環境も整いつつあり、ツールとしてのICT、学びのためにいかにICTを活用するのか、という視点で研究実践を深めていかれたことが2年間を通して理解できた。

最後に事務所の研究員制度について一言申し上げたい。2年間職場を離れて研究を行う制度であるが、私たちの教職大学院が職場を離れずに2年間学校と大学が学び合い、実践研究を行うシステムとの違いを感じている。職場を離れて「外部」から調査研究を行うこと、通常の大学院でもそのような実践研究は行われる傾向が強いのであるが、学校の現場サイドからは、どうしても「外部」への距離感が生れるのではないかと思う。現状の研究員制度はそのようなシステムであると思うが、学校拠点の教職大学院システムとリンクしつつ、事務所のスタッフが日常的に学校現場と緊密につながり合い、学校の内部からの支援やサポートを今まで以上に行うことで、研究員制度を再構築できればと期待している。事務所も教職大学院の拠点機関であるので、この点については、福井県教育研究所や福井県特別支援教育センターと同様の課題が存在するのではないかと考えている。今後とも協働して考えていきたい課題だと思う。



## 平成25年度修了生／美浜町美浜中学校 高木 誠

嶺南教育事務所での、研究発表会に参加することができた。私は、三方中学校の環境教育の発表を聞くことができた。発表者は本校の元同僚でもあったので、楽しみにしていた発表であった。三方中学校の環境教育は、エコ改修された新校舎を使つての環境教育プログラムを設定している。また、地元の自然も生かしたカリキュラムを組んでいる。美浜町では、町ぐるみでエネルギー環境教育を進めており、どのような形で三方中学校では環境教育が行われているかに非常に興味をもった。

三方中学校の環境教育は、現在カリキュラムの作成中である。2年生から本格的にスタートしていた。3年生には策定中の段階であり、これだけは知っておいて欲しいという内容を今年度取り入れているので、1年生のカリキュラムと同じような内容であった。カリキュラムの紹介の後、実際にどのような感じで授業が進むのかを、教材を使用して実体験を行った。牛乳パックで作られたサンバイザーを被り、教室の照明をどこがついているかを考えるものである。このときの教室は照明スイッチが中央、窓側、壁側の3パターンあり、いくつかの照明をつけたり消したりして、実験を行った。さすがに理科教員が多いからか、全部正解した人も何人かいた。しかし、これを生徒が行うと、正答率は低くなるという。エコを意識した教材を使い、エコを考えるなかなか面白い授業である。その後、照明の明るさを実際に測りながら、必要な明るさがどんなものなのかを体験した。十分な教室の明るさというのは、意外に教員としては暗く感じるようである。こういう授業を行うとき、生徒は素直

にその明るさに慣れて、省エネに努力ができる。余計な電気を消した、必要最低限の明るさの状態ですら授業を受けることができる。意外に融通が利かないのは我々教師の方である。結構暗いと感じてしまつて、すぐに電気をつけてしまうようである。気をつけたいものである。

本校でも、エネルギー環境教育を小学校から行っている成果か、無駄な電気を消そうとする生徒がいる。また、教室移動で最後に出る生徒が、電気を消していく場面がよく見られる。その姿勢が大切である。

三方中学校の環境教育で参考にしたいと思う点は、自分たちの校舎を利用していることである。本校校舎もよく設計段階から、いろいろと考えられて造られている。新築移転当時は、設計者から説明を受けるなどの機会があったが、今現在ではそのような機会がない。エネルギー環境教育を推進している関係上、自分たちの校舎の本来の意味を知っておいて欲しいと強く思った。私の理科の授業では、機会あるごとに説明し、その都度生徒たちは驚きを感じ、また興味をもって聞いてくれている。しかしそれは、教職員の異動のある度に意味合いを知る人が少なくなっていくので、本校のエネルギー環境教育のカリキュラムの中に組み込めるといいなと感じた。今回の三方中学校の実践を聞いて、継続的に学習できるようにしなければならないと改めて思った。

## 福井県教育研究所

## 第30回 研究発表会に参加して

## 福井大学教職大学院 非常勤講師 富永 良史

## 人間だからこそできること

受付で明るい挨拶に迎えられる。シンポジウム会場で研究所の皆さんがリハーサルをしている。高揚感と意気込みが漂う。私も感化され、何かが生まれる期待に胸が弾む。教室を渡り歩き、人間だからこそできることに思

いを馳せた私の1日はこのように始まった。

ソーシャルスキルの教室。発表者は一人かと思いきや、もう一人から意表をついて挟み込まれる注釈。さらに一人を交えて展開される寸劇。主旋律の発表と、遊ぶように入り込む注釈、寸劇が絡みあい、ひとつの演奏のよう

に見える。それに共鳴した私たち参加者の対話も響きあう。発表の場は、発表者と参加者がともに創るものだと感じる。

数学の教室。積分における回転体の体積、高校数学の鳥瞰図。グラフも教科書も広く深く見ようと志さない限り、内蔵する豊かな意味は姿を現さず、断片が見えるに過ぎない。見えないものを見通そうと志す時、私たちの内部に繊細な思考が宿る。繊細な思考は繊細に外部を感受し、それは他者との共鳴への道を拓くだろう。いつの間にか私の中にソーシャルスキルと数学の触発が生まれている。

技術の教室。生活と産業と技術をめぐる時間を遡る。昔は何がなくて、何があったのか。かつては見えていて、今は見失われたものを見つめる。見えていたはずのものを再現しようと試みる時、私たちが大切にすべきは何かという思考が引き出され、将来への展望が促される。技術をめぐる思考が、自分のこれからの歩みに重なっていく。今日ここまでの時間が、明日からの歩みに向けて何かを生み出しつつある予感を持つ。

最後の講演。『ロボットは東大に入れるか』。(自分では)入れない、と即座に思う。入る意義も意志も持ち得ず、命令されて作動するに過ぎないから。ロボットに人間の真似はできないと言うけれど、私たちは人間だからこそできることにどれだけ心血を注いでいるだろうか、とも思う。調べ、覚え、予測するだけなら、ロボットは遥か高みに行く。気がつけば、ロボットならもっとうまくできるはずのことに心血を注いではいないだろうか。

人間だからこそできることがある。研究所の内外で積み重ねられた実践と対話。それを支えた意気込み。高揚に感化された胸の弾み。すべての発表に込められた深い願い。教室を渡り歩きながら共鳴し、触発し、明日への展望を生み出しあったこの日の営み。このような豊穡を実現する人間になるためにこそ教育はあるのだと私は確信した。その確信の論理性をロボットのように検証することはできない。しかし、人間である私には、他者との対話の中でその確信をより豊かなものへと更新し続けることができる。

## 教職専門性開発コース2年／至民中学校 加藤 儀直

過日、福井県教育研究所で行なわれた研究発表会に参加してきました。現職の先生方がどういう問題意識や仮説を立てて実践研究に取り組み、成果としてどのような事が得られたのかをそれぞれの先生が報告するという会でした。そしてシンポジウムでは「ロボット」を一つの切り口とした講演がありました。

私が聴いた研究発表の中で、特に印象に残ったのは「校内研修のあり方」についての報告でした。世間では、よく「今時の若者は・・・」と言われることがあります。その意図はその時々によって異なりますが、発表では興味深いことが示されました。授業研究会において、経験の豊富な先生と若手の先生とでは、若手の先生はあまり話をすることが少ないということです。「どのように話の輪に入っていけばいいかわからない」、「話についていくことでやっ」となど、いくつかの理由は考えられますが、若い先生の発言が少ないことは真剣に考えなくてははいけません。

講演会では、「ロボット」を切り口とした講演がありました。「ロボットは東大に入れるか」という、とてもユニークな内容でしたがここから学ぶことは先ほどの「若い先生の発言の少なさ」ということと関連することがあると感じます。ロボットの場合は、「プログラミン

グ」を行うことで大半のことは可能になります。ですが、ヒトの場合はプログラミングというわけにはいかず、スキルを高めていくことが必要になってきます。

ロボットがヒトを超えるということは“あつてはいけない”と個人的には思いますが、ロボットに負けないようにするには「日々学び続ける」ようにするには、教養を高めていくということを大事にしていかなければいけないと改めて考えることとなりました。

ただ、一番気をつけなければいけないことは「日々学び続ける」ということは、知らないことを知ることだけではないということをわかっておくことだと感じます。一度学んだことを何度もとらえ直し続けること。これは「ヒト」だからこそできることであり、こういうことをしなければ、いつかは「ロボット」に抜かれてしまう時が来るのだらうと思います。

## 平成25年度修了生／大野市有終南小学校 野村 陽子

平成26年2月20日(木)に、福井県教育研究所の研究発表会に参加した。特別支援教育センターでも毎年研究発表会を開催している。派遣教員の視点から福井県の教育を考えるシンポジウム、県内の幼稚園から高校までの教員や管理職、教育研究所の研究員による21組もの実践研究報告、そして講演会…といった教育研究所の研究発表会のプログラムや県外の参加者が集う規模の大きさなど、特別支援教育センターとの違いはあるが、同じ県の研修機関として「研究発表会」の在り方について、それぞれに工夫する点があり、参加する度に考える機会を得させていただいている。

21組の研究発表は、7つの会場で3回に分けて行われた。各会場では、参加者は小グループを作り、発表を聞いて参加者同士で意見を交わし合う。自分の興味・関心のある発表を選択し、同じように集った先生方と意見交換などの交流ができるので、参加者の主体性が引き出される。発表者も、自分の発表への反応をより生の言葉で聞くことができたり、みんなで考えたいことを自ら話題提供したりでき、発表が研究の次の展開を考える良い機会になる。

私は、科学情報科の渡辺邦彦先生の「小学校の理科におけるICT(実物投影機やデジタルカメラ)の活用について～児童の関心や意欲を高め、わかる授業をめざして～」の発表を聞かせていただいた。理由は理科に、ではなく渡辺先生にあった。

特別支援教育センターは、嶺南教育事務所とともに昨年から教育研究所の所内研究である協働研究会に声をかけていただいている。この会に私も何度か参加させていただいた。渡辺先生とは同じグループで、サイエンスカーの取組やICT機器を活用した理科の授業づくりの取組など、研究の経過を聞かせていただいていた。そこで、その後の取組の様子や渡辺先生自身が研究を通して導き出したことが何であったのか、その報告をぜひ聞きたいと思ったのである。

理科の学習は、児童が自然に親しむことから始まる。観察や実験を重視していきたいが、内容によっては困難な場合もある。そこで、学校にある身近なICT機器を活用して授業を改善するという試みが渡辺先生の研究内容であった。身近なICT機器として取り上げたのは、実物投影機(書画カメラ)とデジタルカメラ(デジタルビデオカメラ)である。

私は、教育相談で授業を参観させていただく機会が多く、最近では実物投影機を活用して授業を進めておられる先生が増えていると感じている。実物投影機で教材を

拡大して見たり、情報を共有化したりすることは、子どもの興味・関心を引き付け、学習への意欲を高め、学習の視点を明確にできる。どの子にも分かりやすい授業の一助になると理解していた。しかし、報告ではデジタルカメラの動画機能を使って子どもが自分たちで実験の様子を撮影することで主体的に実験に取り組んだり、振り返りの時に動画を繰り返して見直すことで、一回の実験では曖昧にしかとらえられなかったことが確実な概念として理解されたりする様子が紹介された。これからの授業では、子ども自身がICT機器を活用して主体的に学習を進めるという姿が当たり前になっていくのだろうと感じた。

また、授業後に教師が動画を見直した時に、授業中には聞き逃していた子どものつぶやきが記録されていることが、授業実践をした教師にとってはうれしい発見であったという報告もあった。教師が授業を振り返るための「手立て」としてのICT機器の有効性にも着目したいと思った。

発表会では、講座を受講した先生方と共同で考案したという月の満ち欠けモデルの実験装置も紹介された。小グループに分かれて、参加者が実際にその実験装置を体験し、より工夫できる点はないかを話し合い、報告し合った。全員が、一つの単元や教材について、子どもの立場に立って考えるというのは授業研究会のようであり、発表者と参加者の交流によってさらにICT機器の活用について考えを深めることができた。

発表の最後に、渡辺先生は、「授業でICTを活用する際には、ICTはあくまでも指導を補うツールであり、授業の主役は児童と教師であるという意識を大切にすべきである。」「ICTは、I(いつでも)C(ちょっと)T(使ってみる)、授業のスパイスとしてぜひ活用してほしい」とおっしゃっていた。研究所の理科の講座を受講した先生方へのアンケート調査によると、実物投影機の活用率は、台数不足や準備に手間がかかるという理由で51%ということであった。まずは教師一人一人がICT機器を活用してみること、そしてその利点を生かした授業づくりが模索され、成果を共有し合う今回のような実践報告の場は、特別支援教育センターの研修講座でも今年度より行っているが、今後しばらくは必要になるであろうと感じた。

## 大阪教育大学附属天王寺小学校 公開研究発表会に参加して

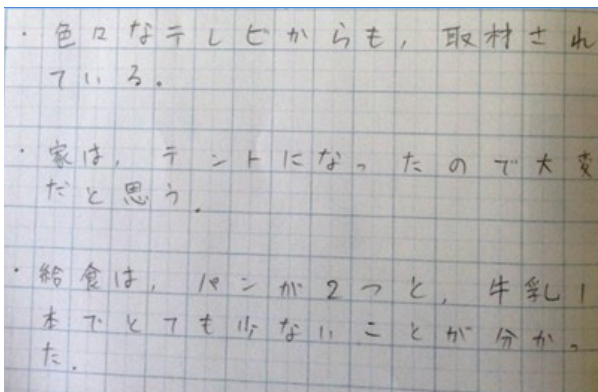
### 教職専門性開発コース2年／至民中学校 加藤 儀直

研究会が終わって学校をあとにしようとしたとき、授業者の清水先生はこんなことを言いました。「成長します！！」と。授業者の先生が、わざわざこのようなことを言いに玄關まで来るのは初めての経験でした。その先生の表情は、どこか「月曜日からの授業、頑張っていこう！！」というように見えました。

授業者の先生が、なぜこのようなことを言ったのか。今回の研究会での授業と分科会での議論をもとに考えてみたいと思います。

#### 1. 「復旧に必要なものは何か」5年生；社会科

授業は、3.11を題材とした「防災」について学習をする時間でした。子どもたちは、これまでの学習の中で①大阪市の防災について、②大阪市のハザードマップ、③学校の備蓄品について学んできて本時の授業という流れでした。清水先生は、「大規模な災害が発生したときに必要なものは何か」を、子どもたちに聞いていきます。「食料」や「水」など、生きていくために必要なものが子どもたちから出されていきました。子どもたちの予想がまとまったところで、先生は一つの資料を示します。そこには、「2回目のお風呂」と大きく書かれています。さらに、食料が不足していることについても書かれています。ここで、この時間の大きな問い「復旧に必要なものは何か」ということが示されました。



この大きな問いを解決していくうえで、授業の中では「資料をじっくりと読む」ことを大事にして進められていきました。地震発生の3月11日から4月24日までのおおまかな「復旧に向けての取り組み」についてまと

められた資料を、時間をかけてじっくりと読み、内容を理解し、気づいたことをノートに書いていきます。数値に注目する子、自分たちの今の生活と比較しながら「驚いたこと」を書いていく子など様々でした。

資料を読んで気づいたことや、驚いたことなどを発表していき、授業の最後に清水先生はこんなことを言います。「復興（もとの生活に戻るには）するには、どうするといいか」と言い、子どもたちは今日のまとめとして自分の考えをノートに書いていきました。

#### 2. 分科会（社会科）

附属天王寺小の分科会（社会科）は、二部構成で行なわれました。福井ではあまりみられません、前半では「教科論」として、社会科で取り組んできた実践研究についての報告がありました。主に、附属天王寺小の研究主題「心が動き出す授業」ということを社会科ではどのように捉えて研究を行ってきたかの報告でした。

社会科では「自力追究」と「集団追究」ということを研究の柱としており、この研究を進めていく前提として「追究を持続する子ども」ということを述べていました。本年度は特に、子どもたち一人一人の「感性」に着目して研究に取り組んでいるようでした。「感性」というと、「それは『美術』で育てていくことではないか」という声が聞こえてきそうです。附属天王寺小で行なっていることは特定の教科でのみに当てはまることなく、「想像力を豊かに、考えたことを言葉や絵などで表



現する」ということを多くの教科で大事にして実践研究に取り組んでいるようでした。

教科論での提案を受けて、後半は清水先生の提案した授業についての検討会でした。まず、清水先生から本時の授業についての説明があり、その後参観した先生方との検討という流れでした。私は、本時の問い「復旧に必要なものは何か」ということについて、一人の女の子（Kさん）の姿を追いながら、私が思ったことと清水先生への質問を話しました。「Kさんは、清水先生の話をもじって聞いており、資料を読んでいるときも何度も読み返しながら気づいたことをノートにまとめていました。はじめてKさんを見たので、Kさんってまじめな子だと授業を参観して感じていました。『活発に発表する』ということまではいきませんでした。Kさんは、授業の終わりに次のような事を書いています。『復旧するのにも時間がかかるので大変だ』と。本時の問いは『復旧に必要なものはなにか』ということで、Kさんはこのようなまとめであったのですが、清水先生としてはどこまでもっていきたかったのかを教えてください」と。このあと、清水先生から授業の今後の見通しも含めて話を聞くことができたのは意義があり、附属天王寺小では1時間の授業の中で「問題の把握」を大事にして授業づくりをされているという趣旨の話がありました。その後、参観していた先生方からは、指導案と本時の展開の整合性を問う質問が多く出てきました。その議論をよく聞いてみると、附属天王寺小で大事にしている「感性」、議論の中で出てきた「葛藤」という2つの言葉が、語り手によって異なった解釈がされていることがわかりました。分科会の最後に感想として「先生方の話を聞いていると、いろいろな『感性』の解釈や『葛藤』の解釈があることがわかりました。今回、『教科論』の提案では、『思考の連鎖を引き出す交流と発問』の実践研究が進んでいないという話がありました。今回の授業での子どもたちが書いたまとめを見ると、先ほど話をしましたKさんのようなまとめもあれば、Hさんのように『復興するのは時間がかかるので、少しでも手伝いすることができたらいいな—と思った』というように、一人一人のまとめが異なっています。おそらく、これだけ異なるまとめを書いていることを子どもたちどうしが知ると、何らかの“葛藤”が生まれるのではないのかなと思います。『なんで、そういうことを考えるの』、ようするに、子どもたち一人一人が根拠をもって議論ができると、ここ（附属天王寺小）で大事にしている『感性』や『葛藤』ということがさらに高いレベルになるのではないかなと感じました」と話しました。分科会での議論で、社会科の中で子どもたち一人一人の追究していく姿が持続して

いくには、根拠をもった議論が展開できることが一つのポイントとなるのではないかと感じました。

### 3. 子どもの姿を語ることと、“整合性”を語ること

今回の研究会では、徹底して「子どもの姿」を見ることをしていました。福井大では慣れ親しんでいる参観の仕方なので、いつものスタイルでいつも通りの授業参観をしていました。1時間目の社会では、授業の参観記録を書くこと、子どもの姿を追うことに没頭していたからなのか、周りの先生方がどのようなスタンスでこの授業を見ているかを考える余裕はありませんでした。2時間目に参観した算数の授業では、参観者の先生の多さに圧倒され、黒板はおろか、子どもの姿は全く見えません。この時間は仕方なく参観者を参観するという、わけのわからないことをしていました。すると、こんなことが見えてきます。参観者の先生方の視線の多くは黒板に向かっており、本時の展開案の余白にメモをとっていく先生が多くいました。社会科の分科会で、多くの先生方が「指導案と本時の学習の整合性」を問うていたことから、分科会での話題の中心が授業の展開についてであったことが理解できました。

指導案との整合性を問うような検討会は、授業者にとっては辛い時間になってしまう場合が考えられます。それは、自分自身の信念を問われるようなことがあるからであると思います。検討会で、「清水先生は、『復旧』と『復興』の違いをどのように捉えているのか」など、参観していた先生から問われる場面がありました。子どもの姿を追う、子どもの学びの筋で授業を語ることを行ってきた私にとって、少し“違和感”がありました。今回のような形の検討会も改めて大事であると考え直すこととなりました。

清水先生自身が、今回の研究会の授業をどのような思いで公開されたのかは正直わかりません。私の中では、検討会で清水先生と議論していたとき、時折ほほえむ清水先生の表情や、何かひらめいたような清水先生の表情がとても印象的でした。授業者と参観者の双方が「ウィン・ウィン」の関係であったからこそ、清水先生が「成長しときます！」と言ったのかなと思います。時には、指導案と本時の展開との整合性を問うていくような授業研究、時には、子どもの学んでいた事実をもとに行っていく授業研究、いろいろな形の授業研究をその時々に行いながら、これからの実践研究に取り組んでいきたいと思っています。

## 平成25年度修了生の学校改革実践研究報告タイトル

[平成26年3月12日現在]

氏名	No.	発刊年	論文名(主タイトルのみ)
西洋平	172	2014	学びを捉える自身の枠組みの変化
筏井紀代美	173	2014	実践から教育観が変容し続けた過程
小川駿也	174	2014	学校や授業を捉える複眼的な視点の獲得
木子泰宏	175	2014	学び続ける存在となるために
北村元輝	176	2014	子どもたちと共に学び続ける教師を目指して
後藤歩実	177	2014	一人ひとりの学びの保障を目指した「共に学ぶ授業」への挑戦
齋藤宏	178	2014	高度専門職としての教師を目指す省察的实践と再構成のプロセス
瀧波裕美	179	2014	個に寄り添うことから個が育つ集団づくりへの模索
月澤光恵	180	2014	子どもたちと関わりながら…
中村諒	181	2014	子どもと寄り添い向き合う教師の挑戦
長谷川恵亮	182	2014	生徒の幸せを願う
堀江沙也香	183	2014	子どもと共に学習価値を追求する教師を目指して
堀江春那	184	2014	子どもの声を聴き“ことば”を伝える教師
孫野貴之	185	2014	生徒が輝き、主体的に参加する授業づくり
加藤学	186	2014	子どもたちのコミュニティの発展とそれを支える教師たちのコミュニティの成長
木下純子	187	2014	生徒の主体性を育てる教育実践
佐々木徳之	188	2014	「繋ぐ」
佐野恭子	189	2014	挫折を越えて
高木誠	190	2014	協働の学び
高間恵美	191	2014	教師の協働による学校づくり
徳丸郁子	192	2014	「協働」を支える教師の同僚性と相互交流
中道優子	193	2014	協働をしくむ
野坂智裕	194	2014	変容する風景を見つめて
野村陽子	195	2014	所員が協働し進める学校支援
林明宏	196	2014	個々のベクトルをそろえ、学校力を高める
富士健一	197	2014	「教師力と組織力向上」の物語を描く
山本毅	198	2014	つながりで協働の学びを生み出す
渡辺裕幸	199	2014	人を大切にする学校づくり
木下慶之	200	2014	I C T (探究 inquiry・コミュニティ community ・つなぐ tsunagu)
召田幸司	201	2014	つなぎ、学ぶ学校づくり

平成26 (2014) 年度 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻 年間計画(案) 2014. 2. 4

4	7	10	1
1 火	1 火	1 水	1 木
2 水	2 水	2 木	2 金
3 木	3 木	3 金	3 土
4 金	4 金	4 土	4 日
5 土	5 土 合同カンファレンス(9:30-12:30)	5 日	5 月 長期実践研究報告作成 (9:30-17:00)
6 日 開講式(1・2年ともに出席)	6 日	6 月	6 火
7 月	7 月	7 火	7 水
8 火	8 火	8 水	8 木
9 水	9 水	9 木	9 金
10 木	10 木	10 金	10 土
11 金	11 金	11 土	11 日
12 土	12 土 合同カンファレンス予備(9:30-12:30)	12 日	12 月
13 日	13 日	13 月	13 火
14 月	14 月	14 火	14 水
15 火	15 火	15 水	15 木
16 水	16 水	16 木	16 金
17 木	17 木	17 金	17 土 長期実践研究報告作成 予備
18 金	18 金	18 土 合同カンファレンス(9:30-12:30)	18 日
19 土 合同カンファレンス(9:30-17:00)	19 土 ※1aか1bいずれか一方に出席してください	19 日 (*長期実践報告作成のためのガイダンス-13:20)	19 月
20 日	20 日	20 月	20 火
21 月	21 月	21 火	21 水
22 火	22 火 集中講座 1a ※ (9:30-17:00)	22 水	22 木
23 水	23 水	23 木	23 金
24 木	24 木 集中講座 1b ※ 必修①	24 金	24 土
25 金	25 金	25 土 合同カンファレンス予備(9:30-12:30)*	25 日
26 土 合同カンファレンス予備(9:30-17:00)	26 土	26 日 (*長期実践報告作成のためのガイダンス-13:20)	26 月
27 日	27 日	27 月	27 火
28 月	28 月	28 火	28 水
29 火	29 火 集中講座 2a* (9:30-17:00)	29 水	29 木
30 水	30 水	30 木	30 金
1 木	31 木	31 金	31 土 長期実践研究報告締め切り
2 金	1 金	1 土	1 日
3 土	2 土	2 日	2 月
4 日	3 日 *2aか2bいずれか一方に出席してください	3 月	3 火
5 月	4 月	4 火	4 水
6 火	5 火	5 水	5 木
7 水	6 水	6 木	6 金
8 木	7 木	7 金	7 土
9 金	8 金	8 土	8 日 大学院入試(第2次)(未定)
10 土	9 土	9 日	9 月
11 日	10 日	10 月	10 火
12 月	11 月	11 火	11 水
13 火	12 火	12 水	12 木
14 水	13 水	13 木	13 金
15 木	14 木	14 金	14 土 長期実践研究報告会(9:30-12:30)
16 金	15 金	15 土 合同カンファレンス(9:30-12:30)	15 日
17 土 合同カンファレンス(9:30-12:30)	16 土	16 日 (*長期実践報告作成のためのガイダンス-13:20)	16 月
18 日	17 日	17 月	17 火
19 月	18 月	18 火	18 水
20 火	19 火 集中講座 3a** (9:30-17:00)	19 水	19 木
21 水	20 水	20 木	20 金
22 木	21 木	21 金	21 土
23 金	22 金	22 土 合同カンファレンス予備(9:30-12:30)*	22 日
24 土 合同カンファレンス予備(9:30-12:30)	23 土	23 日 (*長期実践報告作成のためのガイダンス-13:20)	23 月
25 日	24 日 **3aか3bいずれか一方に出席してください。	24 月	24 火
26 月	25 月	25 火	25 水
27 火	26 火	26 水	26 木
28 水	27 水	27 木	27 金
29 木	28 木	28 金	28 土 シンポジウム(13:30-17:00)
30 金	29 金	29 土	29 日
31 土	30 土	30 日	1 日 ラウンドテーブル(8:30-14:40)
1 日	31 日	1 月	2 月
2 月	1 月	2 火	3 火
3 火	2 火	3 水	4 水
4 水	3 水	4 木	5 木
5 木	4 木	5 金	6 金
6 金 附属中研究集会	5 金	6 土	7 土
7 土	6 土	7 日	8 日
8 日	7 日	8 月	9 月
9 月	8 月	9 火	10 火
10 火	9 火	10 水	11 水
11 水	10 水	11 木	12 木
12 木	11 木	12 金	13 金
13 金	12 金	13 土	14 土
14 土	13 土	14 日	15 日
15 日 附属幼稚園公開保育研究会	14 日	15 月	16 月
16 月	15 月	16 火	17 火
17 火	16 火	17 水	18 水
18 水	17 水	18 木	19 木
19 木	18 木	19 金	20 金 学位記伝達式(18:00-)
20 金	19 金	20 土	21 土
21 土 シンポジウム(13:30-17:00)	20 土 大学院入試(第1次)(未定)	21 日	22 日
22 日 ラウンドテーブル(8:30-14:40)	21 日	22 月	23 月
23 月	22 月	23 火	24 火
24 火	23 火	24 水	25 水
25 水	24 水	25 木	26 木
26 木	25 木	26 金	27 金
27 金	26 金	27 土	28 土
28 土	27 土	28 日	29 日
29 日	28 日	29 月	30 月
30 月	29 月	30 火	31 火
	30 火	31 水	

# 報道FILE

**教師の協働など  
500人話し合う**

**福井大で研究会**

県内外の教育関係者による研究会「実践研究福井ラウンドテーブル2014」が1日、福井市の福井大文京キャンパスなどで開かれた。写真。世代を超えた教師の協働や授業改革などをテーマに、実践事例を踏まえ話し合った。

福井大教職大学院が、教員同士が学び合うコミュニティをつくることで、より良い教育の提供につなげてもらおうと開いた。県内外の小中高教員や大学研究者ら約500人が参加。世代を超えて協働する学校、学び合うコミュニティをつちかす、授業改革などテーマごとの4ゾーンに分かれ、ポスター発表やシンポジウムを通じ、取り組みや課題を話し合った。敦賀市金崎宮での清掃奉仕活動をポスター発表した敦賀工高の谷康博教諭は、学年の担任、副担任以外の教職員に声を掛け、生徒が移動する際の安全確認や清掃用具の準備などさまざまな仕事を分担した経緯を報告。幅広い世代の教員が協働するには「年配の教諭の呼び掛けが必要」と呼び掛けた。

また福井市至民中の淵本幸嗣校長らが学校ゾーンのシンポジウムで、校内で問題行動が発生した後の取り組みについて報告した。学校の実態を把握するため、過去5年間のいじめ、不登校、遅刻や欠席などの推移をデータ化し、取り組むべき優先順位を決定。問題解決は「トップダウンではできない」とし、学年主任らと課題を共有するために、話し合う場を毎日設けてきたと述べた。

研究会は2日も開かれ、少人数グループに分かれてさまざまな課題の取り組み報告などを行う。



【福井新聞社提供 平成26年3月2日 朝刊】

## Schedule

4/6 sun 開講式

4/19 sat-4/20 sun 合同カンファレンス

4/26 sat-4/27 sun 合同カンファレンス (予備日)

5/17 sat 合同カンファレンス

5/24 sat 合同カンファレンス (予備日)

6/21 sat-6/22 sun 実践研究福井ラウンドテーブル 2014

7/5 sat 合同カンファレンス

7/12 sat 合同カンファレンス (予備日)

### 【編集後記】

春は別れと出会いの季節です。3月は院生やスタッフとの別れがありました。共に学んだ皆様、お世話いただきました方々の新天地でのご活躍を心より祈念いたします。…4月は新たな出会いの季節です。本日、満開の桜のもと期待に胸膨らませ、新しいメンバーと平成26年度のスタートを迎えることができました。今号は、退任されるスタッフのご挨拶、ラウンドテーブルの特集を組んでいます。今年度も6月にラウンドテーブルが開催されます。転任された方々にも喜んで参加していただけるような会を新しい仲間と作ってゆければと思います。(稲垣)

## 教職大学院Newsletter No.61

2014.4.6発行

2014.4.6印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

教職大学院Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp









